



第 128 号

令和元年 12月 24日発行

可児市教育委員会

可児市教育研究所

可児市広見1丁目5番地

TEL(0574)63-4841

e-mail :kyoikukenkyu@city.kani.lg.jp

長寿の時代を生きる～可児市教育大綱と計画～

可児市教育委員会事務局長 瀬瀬 新吾

ある海外の研究で、2007年に日本で生まれた子どもの半数が107歳より長く生きると推計されたことを受けて、「人生100年時代」ということばが使われるようになった。いま以上に、長寿化が進むと見込まれている。

今年6月、市の教育大綱が見直され、「目指す方向」に「生涯にわたって学び、成長していく人材を育てる」ことが位置付けられた。これは、「人生100年時代」に象徴される長寿の時代を豊かに生きていくため、小中学校における教育を通じて、子ども達に生涯にわたって学ぶことができる知識や技能、態度等を身につけてほしいことを表わしている。

また教育大綱では、見直し前と同様に、5つの目標の中に、「自分自身を認める」、「命の大切さや相手を思いやる」、「良好な人間関係を築く」、「共に生きるためのルールを守る」、「自分の考えを持つ」、「創造力を発揮する」、「夢に向かってチャレンジできる」、「ふるさとの人や社会、自然との関わりやつながりを大切にする」、「社会に進んで貢献できる」といった子どもの姿を掲げている。

教育大綱を具現化するため、令和元年度までを期間とする教育基本計画後期計画の各施策に取り組んできた。例えば、学校教育力向上事業では、Q-UやNRTを活用して児童生徒の困り感を把握し、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等を配置して、個に寄り添い支援している。「ココロとカラダのワークショップ」や「かにっこ英語」は、社会性やコミュニケーション能力を高めるための特色ある事業として進めている。

また本市の特徴として、公立小中学校に通う児童生徒のうち約9%が外国籍で、増加傾向にある。多い学校では約25%を占め、フィリピンやブラジルを中心にさまざまな国籍の子ども達がいる。NHK「クローズアップ現代+」等では、生徒指導や「ばら教室KANI」、「国際教室」で児童生徒を懸命に支える教職員や、多文化共生を体現する子どもたちの姿が紹介された。国籍や文化の違いを受け入れ、共に生きる貴重な体験をしている。

ほかに、発達に特性がある児童生徒を支える特別支援教育や不登校児童生徒を支える「スマイリングルーム」等も重要な取り組みである。

急激な社会・産業構造の変化が予測される中、現在、令和2年度から始まる教育振興基本計画の策定を進めている。計画案では、①「生きる力」の基礎の育成 ②未来社会を切り拓くための資質・能力の育成 ③学びを支援する環境の整備・充実 の3つを基本目標として位置付けている。

これからの時代を生きる子どもの姿は、発達の段階や特性によって一人一人異なるであろうが、教育大綱にうたう「子どもの心に寄り添い、個々の力を引き出し、伸ばす義務教育」を進めることに大きな意味がある。また、その担い手となる教職員の働き方も問われる時代である。大人もバランスよく自分を磨き続けることができる環境をつくっていく必要がある。

今後も、子どもはもちろん、保護者や教職員が笑顔になれる「笑顔の学校」をめざして取り組みを進めていきたい。

西可児中学校研究だより ～つながる～

可児市立西可児中学校 研究推進委員長 今井 慎也

1 研究主題について

本校は本年度より可茂地区の研修校の指定を受けた。

様々な側面から生徒をとらえた時、自他の関係の中で資質・能力を身に付ける営みを「学び」と定義し、研究主題を以下のように設定した。

仲間と共に、「学び」つづける生徒の育成
～「学び」をつなぎ、生徒をつなぎ、主体的な「学び」を生み出す～

2 研究内容

【研究内容Ⅰ】「学び」をつなぐ工夫

生徒が学習の目的や見通しをつかみ、身に付けた知識・技能・方法を活用・再構築しながら深い学びへと向かっていけるように課題・発問を工夫する。次の要件のいずれかを満たす難易度の高い課題、発問を設定し、生徒の「学び」をつなぐ。

- ・判断をする必要がある
- ・答えや方法が複数存在する（一つではない）
- ・複合的な知識、技能、概念等を要する
- ・他者の判断や解決方法を要する

【研究内容Ⅱ】生徒をつなぐ工夫

生徒が安心して自己表現をしたり他者理解をしたり、他者との「学び」の必要性を感じられたりするように、生徒をつなぐ工夫をする。「学び」の中で、仲間と納得できる答えや合意を追究しつづけるために、仲間とつなぐ・課題とつなぐ・教材とつなぐ・生活とつなぐこと等を意図し、場（6・4・3・2の小集団交流）の設定や、つなぎ方（発問や活動）を工夫する。

【研究内容Ⅲ】学びを振り返る工夫

身に付けた資質・能力や、それを身に付けた方法を振り返り、自己の「学び」を自覚し、さらなる主体的な学びを生み出していけるように、単位時間や単元の「学び」を振り返る場を必ず

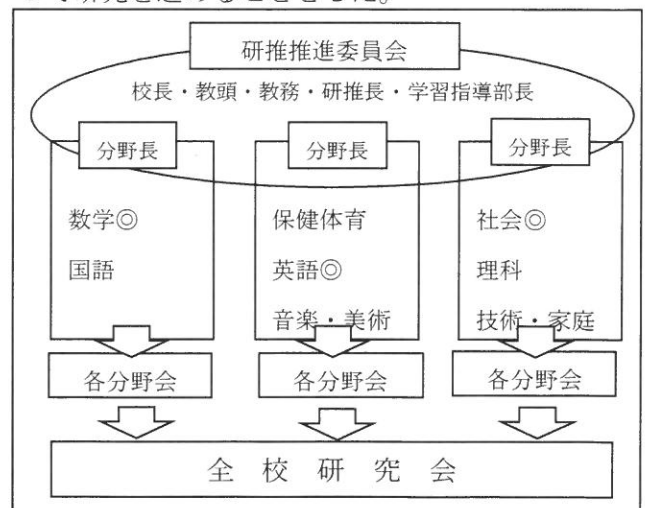
設ける。振り返る内容（学んだ内容や身に付けた技能、学習方法や解決方法）や方法（記述・口述など）、場面は、教科ごとでねらう資質・能力に応じて工夫する。

3. 今年度の研究体制

働き方改革の流れの中で、研究の在り方も考えていく必要がある。生徒と向き合っている日常の実践の時間を重視し、どの教科の、誰の授業でも同じ「学び」が行われる状態を目指している。今年度は以下のことを全ての教員が確実にやっていくようにした。

- ① つながる課題をつくる
- ② (6)・4・3・2の小集団を必ず行う
- ③ 「生徒をつなぐ」発問を用意する
- ④ 「振り返り」の5分を確保する

また、可茂地区内の多くの学校が教科部会を成立することが難しい状況にある中で、研究を進めるための組織づくりも重要な実践となると考え、分野会を軸とした以下のような組織によって研究を進めることとした。



本年度は、研究内容Ⅰ・Ⅱに重点を置いて研究を進めている。来年度は研究内容Ⅲに重点を置き、学びつづける生徒の育成を目指す。

笑顔の学校公表会 ～地域とともに歩む学校づくり～



可児市立今渡南小学校

11月6日、「笑顔の学校公表会」を行いましたところ、300名ものご来賓、保護者、地域の方々、小中学校の先生方にご来校いただき、本校児童の姿を見ていただきました。

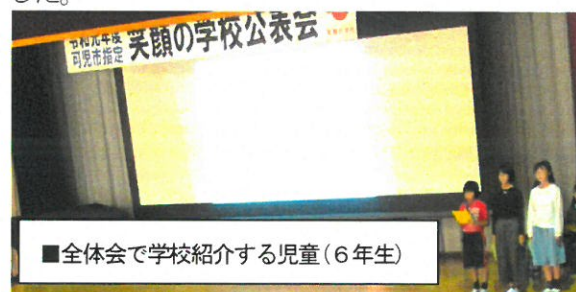
本校では、学校教育目標を具現した児童は、「夢や目標をもち 仲間とよりよくかかわりながら 自分らしさを発揮する子」となって、中学校へ進学することができるのとらえ、日々子どもたちに向き合ってきました。幸いなことに校区には惜しみなく子どもたちを支援して下さる方がたくさんいらっしゃいます。応援して下さる方々と目指す子どもの姿を共有しながら、「子どもは地域で育てる」という理念のもと、学校と家庭と地域が一体となって、地域とともに歩む学校づくりを目指すことが、笑顔の学校に向かう本校の道筋だと考えています。

公表会当日は、子どもたちが地域の方からいろいろなことを教えていただく、「名人に学ぶ会」を公開しました。

- | |
|---|
| 1年生「昔から伝わるあそびを楽しもう」
講師（シルバー、どんぐり文庫、保護者） |
| 2年生「もっとなかよしまちたんけん」
講師（ディマーシュ 中嶋様） |
| 3年生「学ぼう地域の名人さんの技と心」
講師（下恵土地区センター、県ウェルネス吹矢協会） |
| 4年生「鬼まんを作ろう」
講師（入口屋 渡邊様） |
| 5年生「福祉～思いやり・やさしさ～を見つけよう」
講師（市福祉センター） |
| 6年生「知ろう 世界の国々について」
講師（市国際交流協会 フレビア） |



この日は、70名もの地域の方にお越しいただき、公開授業だけでなく、午前中も公開しない学級の子も子どもたちに寄り添っていただきました。おかげで、どの学年でも児童が地域指導者の方と近しく接しながら活動を楽しむことができました。



本校では、目指す子ども像に向かうにあたって、「えがおの'もと'」を膨らませることを大切にしています。「えがおの'もと'」とは、自己肯定感、自己有用感、共感（所属感、コミュニケーション力）です。これらを高める上で、名人に学ぶ会はとても有効です。しかし、このような機会を日常的にもつことは困難です。日常的な取組として、学級内での人間関係を広げる「にこにこタイム」、児童の良さを学年や全校に広める「さくら賞・いまみ賞」、異学年での活動「なかよしタイム」などを行い、児童のかかわりのスキルを高め、「えがおの'もと'」を膨らませてきたことを全体会でプレゼンしました。

参観いただいた方々からいただいたお言葉をこれからの実践に生かし、保護者や地域の方々とともに「笑顔の学校」を目指して取り組んでいきます。



1. はじめに

土田小学校は、外国籍児童が多く、その割合は25%を超えています。授業、日常生活、行事、さまざまなことが外国籍児童の存在を意識して進められ、いつしかそれが、子どもたちにとっても教員にとっても日常となっています。

本校の学校テーマ「共に学ぶ・共に生きる」には、外国籍児童も日本籍児童も、男子も女子も、高学年も低学年も、算数が苦手な子も得意な子も、足が速い子も遅い子も、個々の違いを互いに認め合いながら、楽しく学校生活を送ってほしいという願いが込められています。



2. 実践

①共に学ぶ

教科研究では、研究主題を

『主体的に自分の考えを持ち、仲間と共に学び合える子をめざして ～「やってみる」「できる」「わかる」喜びを実感する授業づくり～』とし、算数科の授業において以下の研究内容に沿って仮説を立て、研究を進めてきました。公表会では3つの学年と国際教室を公開し、児童の学びの姿を参観していただきました。

研究内容 1:主体的に考えを持つ児童の育成

問題提示時や自己の追究時に、基礎・基本を大切にしながら、追究意欲を高めるような手立ての工夫をすれば、主体的に自分の考えをもち、数学的な思考力・判断力・表現力を育成することができる。

研究内容 2:仲間と共に学び合える児童の育成

習熟度別少人数指導の特色を生かし、ねらいを明確にした小集団活動を位置づけ、活動を活性化するための工夫をすれば、対話を中心とした学び合いが充実し、数学的な思考力・判断力・表現力を育成できる。

②共に生きる

土田小学校では、学校をよくしていきたいという気持ちを「3つの伝統（あいさつ・歌声・そうじ）」と呼んで大切にしています。

伝統1:「あいさつ」

「おはよう」の一言とハイタッチをすることで、言葉が通じなくても、自然に笑顔になり、気持ちよく一日がスタートします。

伝統2:「歌声」

歌詞が分からなくても、ひらがなの歌詞カードと、聞こえてくる音楽があれば



笑顔で口ずさむことができます。公表会で参観していただいた歌声集会は、先生方も巻き込んで、笑顔の大合唱となりました。

伝統3:「そうじ」

雑巾、ほうきなど、一人一役をもち、「土田小学校の環境をよくしよう」という目標達成のため、黙ってすみずみまで掃除をします。

このように土田小学校では、外国籍児童も日本籍児童も、皆一緒になって活動することは決して特別なことではありません。しかし、外国籍児童の頑張りや苦労は並大抵のものではないでしょう。周りの児童や教員がその頑張りや苦労を理解し、進んで関わるのが「共に生きる」上で大切なことであると考えます。

3. まとめ

様々な国籍の仲間と関わり合い、自分との違いを柔軟に受け入れつつ、元気に明るく過ごす子どもたち…それは、本校児童のよさです。

「みんなちがって みんないい」

今回の笑顔の学校公表会において、そんな土田小学校児童の素晴らしさを感じていただけたなら幸いです。

1 研究実践

【研究内容】I 子どもが主体的に既習の見方・考え方を活用するための指導計画・指導過程(導入)の工夫

○ 既習事項を自覚させる指導方法の工夫

導入時に本時獲得したい見方・考え方の元となる既習の見方・考え方を自覚させるようにした。1年生「たしざん」では、前時学習したブロック操作について振り返る時間を設け、実際に子どもたちに操作させたり、既習の考え方の掲示物を作成したりして参考にさせた。

【研究内容】II 必然性のある協働的な学習活動を位置付けた指導過程(展開)・学習活動の工夫

○ 話し合いの段階表の作成と活用

本校研究推進委員会では、見方・考え方を深めるための必然性のある話し合いを追究するために「話し合いの段階表」(「協働タイムのレベル」)を作成した。

この表を全職員が持ち、指導に当たることによって指導者自身が「この時間の話し合いは、何をねらいとした話し合いであるのか」を意識して指導できるようになり、よりねらいに沿った「話し合いの形態」や「深めの発問」が可能になった。

○ 協働的な学習活動を活性化させる課題及び支援の工夫

協働的な学習活動に必然性をもたせるのに重要な要素となるのが、子どもの思考の流れを生み出す学習課題である。先行研究を参考に「協働

的な学習活動を活性化する8つの学習課題」を教師に提示し、学習課題の改善や深めの発問の工夫に努めた。

「協働学習のための学習課題づくり8つの工夫」

- ① 「なぜ？」と問い根拠や原因を深く考えさせる
- ② 「工夫して～しよう」と投げかけ、技能や操作の高まり・深まりを促す
- ③ 「～に着目して」と着眼点を与えることで既習の知識・技能の広がりや深まりを促す
- ④ 「～を見つけよう」と未知の謎にチャレンジさせる
- ⑤ 「～を説明しよう」と促すことで論理的説明力の向上を図る
- ⑥ 「仲間の考えのよさを取り入れ～」グループで交流して」などの投げかけで協働的な学びを促す
- ⑦ 「資料を参考にしながら」と投げかけることによって資料活用を促す
- ⑧ 「～と…を比べて」とか「～と…を合わせて」と投げかけ比較あるいは統合思考へ方向づける

【研究内容】III 見方・考え方が広まり・深まったことを実感させる評価の位置付けと工夫

○ 発達段階に応じた「数学的な見方・考え方」の深まりの自覚を促す評価の工夫

「進んで」「できた」「協働」の3つの観点から子どもが、自らの見方や考え方が深められたかを振り返られるようにした。「協働」という観点では、教師が「深い学びにつながっていたかどうか」について毎時間毎に説明し、子ども自身が「深い学び」を自覚できるようにした。

2 成果と課題

協働的な学習活動を取り入れることにより、数学的な見方・考え方、技能、意欲の向上が認められた。しかし、知識・理解が振るわなかったことから、協働的な活動と習熟の時間とのバランスが課題として残った。

「協働タイム」のレベル

	聞くこと	話すこと
レベル5	合意形成する・評価・修正する	自分の考えを述べ、相手の考えを聴き、話し合いの目的に沿って、話し合いの場から退く。
レベル4	整理・統合する・判断する	自分の考えを述べ、相手の考えを聴き、話し合いの目的に沿って、話し合いの場から退く。
レベル3	聞き分ける・反応する・関わる	自分の考えを述べ、相手の考えを聴き、話し合いの目的に沿って、話し合いの場から退く。
レベル2	理解する・伝える	自分の考えを述べ、相手の考えを聴き、話し合いの目的に沿って、話し合いの場から退く。
レベル1	受領する・発信する	自分の考えを述べ、相手の考えを聴き、話し合いの目的に沿って、話し合いの場から退く。

令和元年度 夏季研修講座の報告

夏季研修講座一覧 ※No1～6 はオープン講座

No	講座名	開催日	会場	参加者数
1	心に響く言葉かけ ～保護者対応の仕方～	7/26	土田小学校	45
2	SCによる研修「発達障害の人の見え方・感じ方」	8/23	帷子小学校	31
3	「授業改善入門講座」	7/26	春里小学校	20
4	陶芸体験	7/26	東明小学校、陶芸苑	24
5	茶道体験	8/6	東明小学校 和楽居の間	30
6	新しい道徳科の授業の進め方	8/21	広見小学校	54
7	可児のじまん巡り・茶道体験研修	7/23	郷土歴史館	中止
8	教育実践論文書き方研修会	7/24	総合会館	7
9	ココロとカラダワークショップ講座	7/24	可児市文化創造センター	20
10	特別支援教育連続講座②	7/25	総合会館	27
11	幼保小中連携講座【午前の部】	7/26	かわいい幼稚園	15
12	幼保小中連携講座【午後の部】	7/26	総合会館	43
13	英語コミュニケーション活動研修会	7/29	総合会館	36
14	教えてあきら先生～ものづくりを通じた学級経営～	7/29	総合会館	9
15	市長から学ぶ「ふるさと可児」に誇りと愛着をもつ教育	7/30	福祉センター	79
16	特別支援教育連続講座③	8/1	総合会館	44
17	プログラミング教育講座	8/2	今渡南小学校	34
18	学校と法律に関する研修	8/21	総合会館	19
19	教育講演会	8/23	可児市文化創造センター	457
			合計	994

7/24 ココロとカラダワークショップ



Ten Seeds さんのご指導のもと、初任者 18 名がワークショップを行いました。

7/26 幼保小中連携講座



可茂特別支援学校の浅井洋子先生から、特別支援教育について学ぶことができる講座でした。

7/29 教えてあきら先生



学校教育課の伊佐治晃先生のもと、ものづくりを通じた学級経営について楽しく学べる講座でした。

7/29 英語コミュニケーション活動研修会



演劇の手法を取り入れた英語によるワークショップを体験できた講座でした。

7/30 市長から学ぶ「ふるさと可児」に誇りと愛着をもつ教育



可児市長より、可児市の歴史や自然について学べ、さらに可児市を理解できる講座でした。

8/1 プログラミング教育講座



来年度から実施されるプログラミング教育について体験して学べた講座でした。

自分たちで考え作り出す児童会

～みんなで笑顔のはなをさかせよう～

可児市立兼山小学校

兼山小学校は、全校児童59名です。小さな学校だからこそ、1～6年生までが一つになり、子どもたちが考えて作り出す様々な取り組みを行っています。

1) サロン交流会

兼山小学校では、1～6年生の縦割りグループを「ファミリー班」と呼んでいます。休み時間に一緒に遊んだり、話したりと仲良く活動しています。後期には、そのファミリー班で兼山に住んでみえるお年寄りの方との交流活動を行います。各ファミリー班では、6年生がリーダーとなり、計画や準備を行います。6年生は「どうしたら喜んでもらえるか。」「どうしたら低学年の子たちは活動しやすいか。」など、お年寄りの方だけでなく、下学年のことも考えて計画、準備を進めていきます。1～5年生も6年生の計画のもと、一緒に準備をします。始まって4年目の活動ですが、兼山のお年寄りの方がとても楽しみにしてくれる恒例行事になっています。

今年度も、11月に行いました。紙芝居や兼山かるたなどをして、ふれあいを楽しみました。1～6年生、そして地域の方の笑顔があふれるサロン交流会になりました。



2) 委員会活動

委員会は4～6年生が、図書・歌声委員会、生活・そうじ委員会、集会・あいさつ委員会の3つの委員会に属し、兼山小をよりよくしようとアイデアを出し、活動しています。

集会・あいさつ委員会の取り組みの1つに全校のあいさつをよりよくしようとし



た「ランクアップあいさつ名人」の取り組みがあります。この取り組みで、全校がもっとあいさつをしようという意識がより高くなりました。また、1年生全員が上級生の姿に憧れ、自分たちもあいさつ名人になろうとはりきる姿が見られました。あいさつ名人には委員会から名人のバッジと全校みんなから大きな拍手をもらえ、笑顔いっぱいになりました。今後もさらにランクアップのあいさつをめざしていきます。

3) おめでとう週間

4月には全校で1年生を歓迎する「おめでとう週間」を行います。「1年生が楽しめる遊びは何かな。」「1年生が分かりやすいように説明しなくちゃ。」と学年ごとで話し合います。そして、1年生と各学年が休み時間を使って遊びます。この活動は1年生だけでなく、すべての学年が笑顔いっぱいになります。入学したばかりの1年生も安心して学校に来られるきっかけになる活動となっています。



このように、もっと楽しい学校になるためにどうしたらよいかと、児童会を中心に一緒に考え、協力できる兼山小学校です。これからも、児童が自ら考え、自ら動くことできる児童会でありたいと思います。子どもたちの笑顔があふれる「兼山小学校」になるために。

こんな子どもたちが不登校に

スマイリングルーム

不登校の児童生徒数が平成30年度過去最多を記録し16万人を超えました。急激な伸びです。可児市も同様の傾向にあります。その影響か、スマイリングルームに通う子どもたちも増えています。

このような状況の中、どのような子どもたちが、学校生活や人間関係に不安を抱え、不登校になりやすいのかを考えてみたいと思います。



1 自閉症スペクトラム

信州大学医学部付属病院の本田秀夫先生は、「自閉症スペクトラムは人口の10%は存在します」と話されています。さらに先生は「それは障害というより、少数派の“種族”のようなものと考えるべきで、10人に1人が『生きづらさ』を感じながら生きています」とも話されています。

自閉症スペクトラムの特性を簡単にまとめると、「**臨機応変な対人関係が苦手**で、**自分の関心、やり方、ペースの維持を最優先**させたいという**本能的志向が強い**」と言えます。このような特性があるため、①他人と社会的関係を持ちにくい ②コミュニケーションを取りにくいなどの問題が出てきます。そして学校生活の中では次のような『**困り感**』が表れてきます。

①変化に弱い

突然の予定の変更に不安を感じたり、パニックになったりすることがあります。予め順序立てて知らせてあげることが大切です。

②誤解されやすい・誤解しやすい

「独特なイントネーションで話す」「話しかけても知らん顔をする」「相手の気持ちを逆なでするようなことを言うてしまう」このような行動から「変な人だ」と思われ、誤解につながってしまいます。また自閉症スペクトラムの人自身も相手の言動を誤解しやすい傾向があります。

③不安を持ちやすい

自閉症スペクトラムの10～37%にうつ病性障害など気分障害が発症するという報告があります。対人恐怖症と間違いされやすいという特徴もあります。

多くの自閉症スペクトラムの子どもたちは、専門機関を受診していませんので特定はできませんが、困り感を感じている子が教室の中には意外と多くいると考えなければなりません。

2 人一倍敏感な子 Highly Sensitive Child

アメリカのエレン・N・アーロンさんが提唱した概念で、病気でも発達障害の一つでもありません。頭文字をとってHSCと呼びますが、知られるようになってきたのはまだ最近です。

人一倍敏感な子(HSC)の特徴としては、**①深く考える ②過剰に刺激を受けやすい ③他人の気持ちにとっても敏感である ④強い感情に揺さぶられる ⑤石橋をたたき過ぎる** という点が挙げられます。

HSCは男女差に関係なく、5人に1人の割合で存在するそうです。彼らは、学校など多くの人間がいる場所に長時間いると精神的に疲れてしまう。また学校内での音や子どもたちの笑い声、教師の怒鳴り声や子どもが教師に叱責される光景も苦痛や恐怖の対象になるようです。それらがストレスになり不登校につながっていきます。学校への安心感を高め、自己肯定感を育むことが大切です。



3 境界知能

不登校の子どもたちが抱える不安に、「勉強が分からない」「勉強についていけない」という問題があります。

この学習の問題は、生活環境なども関係しますが、個々の知的なレベルにも左右されます。標準のIQは100ですが、IQ71～84の子どもたちを『**境界知能**』と呼んでいます。IQ70以下の知的障害のレベルではありませんが、標準よりやや低い子どもたちです。これらの子どもたちは通常の学級で在籍することが原則ですが、「低学年でよい教師に当たった時は知的能力も向上していくが、そうでないと9歳の壁前後で通常の教育から脱落し、知的にも下がっていく」「それなりに適応することもできるが、不適応が著しい場合は不登校や非行などの形を取ることも多い」ようです。『境界知能』は全児童生徒の13～14%に上ります。適切な学習支援が学校への適応を高めることになります。

3つの側面から、不登校になりやすいリスクを抱えた子どもたちを紹介しましたが、これ以外にも様々な要素が重なって不登校につながっていくと考えられます。子どもたちの様々な特性を理解しながら、子どもたちが見せるサインを見逃すことなく、早期に対応していくことが不登校対策の最大のポイントになります。